

# 教育学・教育人間学への関心

中学の頃は、当初、野球や科学クラブに熱心で、家でも試験管を使った実験などをしていたものである。いつの頃からか、ものを作ることや事務的な仕事などよりは、人間を育てることが自分には向いており、尊いことであると考えようになり、教師をめざす。

中学、高校と英語にも興味があり、英語クラブに所属し、そのまとめ役(実際は、大学2年まで)をしていた関係で、当初は、「英語」の教師をめざす。もともと、「社会科・倫理」(当時の高校での科目)や思想家にも興味があり、大学で勉強・研究するうちに、「教育学」や「哲学」に目覚める。教育の思想・哲学の面白さに気づかされる。

■教育哲学

■カリキュラム論

■教育方法学

■教職総合演習A

## 池野 正晴 (いけの まさはる)



教育現場での教師の経験あり。国立大学の附属学校では、毎年の研究会で、2日間連続の授業公開をする。同じクラスで、連続の教育内容を扱うため、教師の指導と子どもたちの出方で授業は大きくずれることが常。それを、修正しつつ、授業を展開する。2日目の修正は、1日目の授業や授業協議会や、全体会等が終わり、参会者が帰ってから。修正指導案の作成・印刷、新しい教材の作成等、時計は夜中を回ることが常だった。

教育や哲学・倫理学の古典として、英語圏やドイツ語圏の文献が多く紹介され、その時点で、英語は「手段」にしようと考えられるようになる。元々語学の学習が好きで、第二外国語にドイツ語を履修しており、ちょうどよかった。(英語科の教員免許の取得もめざしており、シェークスピアの作品などを同時進行で読んだものである。)

私の場合、授業の予習といったら、だいたい英語かドイツ語(大学院では、ラテン語も加わる)の文献を読み、時には、それらの内容をまとめてレポートすることに明け暮れていたものである。

学部1・2年の頃、倫理学の先生に、ある哲学者の講演に連れて行ってもらったことがきっかけで、その哲学者の思想に興味をもつようになった。当時、大活躍の、ドイツの教育哲学者である。すでにその方の著作の多くが日本語に訳されており、ないし、訳されつつあり、いろいろと読みあさっていったものである。

著作のなかでは、実存哲学とか生の哲学、精神科学、現象学、解釈学などの言葉が飛び交い、それら哲学の新しい方向からの教育の見方として、教育人間学の存在に気づき、そこでの成果(「危機」、「出会い」等の教育諸現象の、実存モデル・非連続的形式としての意味とか第三範疇の可能性など)に魅力を感じた。大学院に進んでも、その方の思想の解明に勤しんだものである。

現在は、現場経験も生かし、授業論や教科教育学にまで研究の範囲を広げている。